

# ミステリ読書案内

2024. 3. 27 発行元

第562号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## 都筑道夫「ベスト表」(再掲)

玄人好みのマニアックなミステリを手掛けた都筑道夫の『ベスト表』を再び取り上げる。独自の「ミステリ論」を持ち、それを自分の作品の中で実現しようとさまざまな工夫を凝らした。「ミステリの職人」。

### 理論派のミステリ作家

都筑道夫は第106号で紹介した評論集『黄色い部屋はいかに改装されたか?』で知られるように、日本作家の中では一番の理論派だと言ってもいい。「論理のアクロバット」を実践しようと試みた人である。初期の作品には実験的な試みが盛り込まれている。以前の『代表作』の号で取り上げた『三重露出』『猫

の舌に釘をうて』『キリオン・スレイの生活と推理』にしてもその典型例であるし、第334号で取り上げた『なめくじ長屋捕物さわぎ』シリーズもその理論に沿ったものとして書かれている。

今回は『やぶにらみの時計』と『誘拐作戦』を取り上げてみることにした。最初、感覚が掴めなくて読みにくさを感じるかもしれないが、都筑道夫らしさ全開の作品である。

### 「やぶにらみの時計」

1961年中央公論社。私の手元にあるのは1975年の中公文庫版。都筑道夫の最初の長編ミステリ作品。『猫の舌に釘をうて』がその次。真鍋博の手による時計マークが各章ごとに出てきて、その時点の時間を示す。

出だしは「目蓋がこわばっている」で始まって、いかにも一人称の文のように思えるのだが、次の段落に行くと「きみの目蓋は、たしかに重い」となって、ふしぎな二人称表記になって続いていく。この辺からしてもう「やぶにらみ」状態である。そして、目覚めてみると傍には見知らぬ女がいて、自分のことを別?の名前で呼ぶ。酔っぱらってしまって記憶を失ってしまったのだろうか。他人のもののように思える服、時計、財布…。まるで妻のような女に見送られて外へ出掛けるのだが…。乗ったバスの窓ガラスに映る自分の顔は見慣れた顔なので安心する。自分本来の住処であるアパートに帰ってくる。鍵がかかっている。ドアを叩く。すると妻の雅子がドアを開けて「あんた、どなた?」…。自分が自分ではなくなってしまった恐怖と焦りのドタバタが続いていく…。

### 「誘拐作戦」

1962年講談社。私の手元にあるのは1976年の中公文庫版。初期の傑作。本書の仕掛けの第一は、犯人側の五人が10ある章を交代で書くというもの。誰がどのように書くかは自由なわけで、読み手側は「この文は誰の担当?」と思ったり、「意図的に書いたり書かなかったりしている内容があるのではないか?」などと勘ぐったり想像を膨らましたりすることができる。

五人の人物が二台の車に乗って夜間、京葉道路を走行。道路に横たわる女性を発見。交通事故か?それとも車から放り出されたのか?心臓は動いている。バックの中を調べると住所、電話番号、名前・財田千寿子と書いてある。金融業・財田徳太郎の娘とわかり、架空の誘拐事件をでっちあげることに。千寿子にそっくりなフーテン娘のお妙を使って…。「誘拐ミステリ」のパロディ版という展開が待っている。

### 《都筑道夫作品のベスト表》

1. 誘拐作戦
2. やぶにらみの時計
3. 三重露出
4. 七十五羽の鳥
5. 猫の舌に釘をうて
6. 最長不倒距離
7. キリオン・スレイの生活と推理 (短)
8. 退職刑事 (短)
9. 血みどろ砂絵 (短)
10. キリオン・スレイの敗北と逆襲
11. キリオン・スレイの復活と死 (短)
12. くらやみ砂絵 (短)
13. 酔いどれひとり街を行く (短)
14. キリオン・スレイの再訪と直感 (短)
15. 朱塗りの壁に血がしたたる
16. からくり砂絵 (短)
17. あやかし砂絵 (短)
18. 悪意辞典 (短)
19. なめくじに聞いてみる
20. 悪夢凶鑑 (短)
21. 悪業年鑑 (短)
22. 四十分間の女 (短)
23. かげろう砂絵 (短)
24. 紙の罟
25. 危険冒険大犯罪 (短)
26. 絶対残酷博覧会 (短)
27. 退職刑事3 (短)
28. まぼろし砂絵 (短)
29. 暗殺教程
30. なめくじ長屋とりの落語 (短)
31. 退職刑事健在なり (短)
32. 悪意銀行
33. 暗殺心
34. 西洋骨碑探偵術 (短)
35. 髑髏島殺人事件
36. 前後不覚殺人事件
37. おもしろ砂絵 (短)
38. まだ死んでいる
39. 名探偵もどき (短)
40. 蜃気楼博士 (短)
41. いなづま砂絵 (短)
42. 南部殺し唄
43. 吸血鬼飼育法 (短)
44. 梅暦なめくじ念仏 (短)
45. 探偵は眠らない
46. さかしま砂絵 (短)